

移動する家族の生活史 — 旧産炭地を事例として —

Life History of Moving Families: A Case Study of Ex-Coal-Mining Areas

永吉守 (NPO 法人大牟田・荒尾 炭鉱のまちファンクラブ理事 / 福岡工業大学、他、非常勤講師)

**【幹事】**

木村至聖 (京都大学大学院文学研究科 博士後期課程)

**【メンバー】**

有菌真代 (京都大学大学院文学研究科 博士後期課程)

井上博登 (早稲田大学大学院人間科学研究科 博士後期課程)

中島満大 (京都大学大学院文学研究科 修士課程)

西牟田真希 (関西学院大学大学院社会学研究科 博士後期課程)

**【ねらいと目的】**

近年、産業遺産の保存やその観光利用による地域再生などの観点から、かつて重工業の象徴であった炭鉱が再び注目を集めている。しかし、その炭鉱という特徴的な社会の生活に関する記憶の語りの収集は十分になされているとは言えない。しかも、現在集められている語りの多くは、坑内労働者としての男性の語りである。そこで本研究では、現代社会において周縁におかれている炭鉱社会の記憶のなかでも、以下のように女性や下請労働者といった、二重に周縁化された人々の語りにスポットを当てる。1) 坑内労働者の家族 (女性や子ども) の記憶 (ジェンダーと家族)、2) 炭鉱労働の周辺にいる第一次産業従事者、商店経営者、下請労働者などの記憶 (周縁性)、3) 現在は炭鉱を離れて暮らしている人々の記憶 (移動性)。

本研究では、各メンバーが主に九州の福岡や長崎を中心としたフィールドで、これらの人々の記憶の語りを集める。それにより、炭鉱社会の生活の記憶をより生き生きと描きだすことを目指すとともに、産業構造の転換=脱工業化という大きな社会変化の社会的意義を、地域社会の多様性や家族=親密圏という視点から再考していくことを目的とする。

**【活動の記録】**

2008年9月28日～10月5日

調査地：東京都、参加者：木村・西牟田

調査内容：旧産炭地からの移住者へのインタビュー

10月23日～27日

調査地：岩手県松尾・秋田県小坂・尾去沢、参加者：西牟田

調査内容：鉱山遺跡の保存に関する現地調査・資料収集

11月2日～9日

調査地：福岡県大牟田・熊本県荒尾 (旧三池炭鉱)

参加者：井上・木村・中島・永吉・西牟田、

調査内容：旧産炭地の炭鉱関係者およびその家族へのインタビュー

12月8日～14日

調査地：長崎県、参加者：井上

調査内容：旧産炭地周辺の関係者およびその家族へのインタビュー

2009年1月21日～27日

調査地：長崎県（旧端島炭鉱）、参加者：井上・木村

調査内容：旧産炭地の炭鉱関係者およびその家族へのインタビュー

2月18日

第二回全体研究会で中間成果を報告「移動する家族の生活史——旧産炭地を事例として」  
（永吉・井上・木村）

### 【成果の概要】

これまでに、5度の調査を実施した（9月28日から10月5日に東京（木村、西牟田）、10月23日から27日に東北（西牟田）、11月2日から9日に福岡県大牟田・熊本県荒尾（井上、木村、中島、永吉、西牟田）、12月8日から14日に長崎（井上）、1月21日から27日に長崎（井上、木村）、（括弧内は参加者））。

これらの調査では、NPO法人「大牟田・荒尾 炭鉱のまちファンクラブ」、「軍艦島を世界遺産にする会」の協力の元に、旧端島炭鉱（長崎県）、旧三池炭鉱（福岡県・熊本県）に関わる計40名以上の協力を得て、多様なライフヒストリーを聞き取ることができた。三池炭鉱では、やはり争議という出来事が語りを構成する上で大きな影響を持つことが確認できたが、本プロジェクトでは争議に直接関わらなかった事業者や若い世代への聞き取りも行なったことにより、争議後の「移動」がコミュニティの再編成に関わっているという側面を指摘できた。また、端島炭鉱でも、周辺の高浜という漁村との密接な関わりのなかで、個人や家族が巧みな生活戦略によって生きてきた様子を明らかにできた。

成果のアウトプットとしては、GCOE 第二回全体研究会（2月18日、於：京都大学文学部会議室）にて、永吉、井上、木村が共同報告を行なった。50名以上の参加があり、報告内容に関する質問、有益なコメントをいただいた。さらに現在、これらの研究成果をGCOEの報告書として提出すべくとりまとめ中である。調査協力者個人に対しては、この報告書の関係箇所を製本して贈呈するほか、完成した報告書を大牟田市、長崎市の図書館、および協力をいただいた各NPOにも寄贈する予定である。



2009年1月25日、長崎市野母半島より眺める軍艦島。  
インタビューの帰りに撮影。

